

「家庭を支える地域の教育力を高める方策について」（意見書）

平成24年4月

富士市社会教育委員会議

平成24年 4月10日

富士市教育長 山田幸男様

富士市社会教育委員会  
委員長 松本玲子

意見書の提出について

今期富士市社会教育委員会議において「家庭教育を支える地域の教育力を高める方策」について研究し意見書を取りまとめたのでこれを提出します。

## 目 次

【はじめに】	1
1 課題研究への取り組み	2
2 家庭の役割	2
(1) 親子の共育の場	2
(2) 地域活力の源	3
3 地域の役割	3
(1) 互いを支え、助け合う場	3
(2) 家庭の協育の場	3
(3) 郷土愛を育む場	4
4 家庭・地域の教育力の現状と課題	4
(1) 家庭の教育力の現状と課題	4
(2) 地域の教育力の現状と課題	4
(3) 家庭と地域の教育力に関する専門機関の調査	5
5 地域の教育力を高める方策	5
(1) 地域の教育力を高めるための視点	5
①楽しい活動	5
②出会いの場の創出	6
③個人の意識改革	6
④様々な主体の意識改革	6
⑤親子・親・子の居場所づくり	6
⑥学校教育への保護者や地域の人たちの参加	6
⑦社会教育団体等の横の連携	7
⑧リーダーの役割のスムーズなバトンタッチ	7
⑨新たな人材の発掘	8
⑩人材の育成	8
(2) 家庭の教育力向上のための「理想的な地域の取り組み」	8
①地域ぐるみで子どもを育てる「ふれあい子ども教室」の実施	8
②「通学合宿」と「子育て勉強会」の同時開催	9
③「地域の大人と小・中学生が語る会、幼児と親を含んだ交流会」	10
【おわりに】	11
【巻末：資料1】「家庭が抱える問題の類型化」	12
【巻末：資料2】「地域教育力の向上につながる取り組み事例」	13～18
【議論経過】	19
【社会教育委員名簿】	21

## 【はじめに】

平成18年12月、教育基本法が改正されました。この改正の背景には、家庭や地域の教育力の低下に対する大きな危機感があります。

第10条に「家庭教育」が新たに規定され、第2項においては「国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の提供その他家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるように努めなければならない」と定められました。

さらに、第13条では「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が新たに規定されるなど、今後、地域社会全体で家庭教育を支援していくために、地域の教育力の再生を図っていくことが求められています。

かつて、家庭の高い教育力によって育まれた子ども達は、やがて大人となり、そこに暮らす人々が、お互いを認め合い助けあう良好な地域社会を作り上げていました。

しかし、近年の都市化、核家族化、少子化といった社会環境の急速な変化は、個人の価値観やライフスタイルの多様化を生み、家庭本来の役割や地域の人々のつながりを希薄化するなど大きな影響を及ぼしています。

すべての人々が、こころ豊かな生活をおくり、しあわせを実感できるような地域社会を構築するためには、家庭とそれを支える地域の教育力の向上が差し迫った課題となっています。

このため、今期の社会教育委員会では、家庭と地域が相互に影響を及ぼしあう関係に注目し、『家庭を支える地域の教育力向上のための方策について』を研究課題としました。

家庭を支える地域のあり方や関わり方、活力を失っていると言われる地域社会を復活させるための方策について、社会教育委員としての意見をまとめたものです。

本意見の趣旨を御理解いただき、教育行政だけでなく多くの施策において、家庭を支える地域の教育力活性化促進の一助としていただきたく、よろしく申し上げます。

## 家庭を支える地域の教育力を高める方策について

### 1 課題研究への取り組み

私たち社会教育委員は、平成22年3月に提出した「社会教育における人材育成について～まちをつくる人材の発掘と育成～」において、地域の人間関係の希薄化や子育ての孤立化がもたらす課題について指摘しました。そして、それらを解決する方策の一つとして人材育成の観点から提言したところです。

今期の研究課題では、あらためて家庭や地域のあり方を考える必要があることから、私たちは、まず家庭や地域が抱える問題等について、「子ども」、「親」、「家族間」「地域」、「社会環境」の5つに類型化しました。

次に、市内で行われている、地域の教育力向上につながる実際の取り組み事例を取り上げ、「取り組みのきっかけ」、「効果」、「課題」を整理しました。

これらの作業と議論を経て、家庭と地域の役割、それぞれの教育力を低下させている原因に関する考察をまとめ、家庭を支える地域の教育力向上のための重要な視点と3つの「理想的な地域の取り組み」と併せて提案します。

【巻末：資料1】「家庭が抱える問題の類型化」

【巻末：資料2】「地域教育力の向上に繋がる取り組み事例」

### 2 家庭の役割

家庭は、人の豊かな感情をはぐくみ、生活の基礎・基本を子どもの発達段階に応じ教える場であり、家族一人ひとりの成長や地域社会を支える基礎的な集団としての役割を担っている最も大切なものといえます。

#### (1) 親子の共育の場

家庭は、家族みんなの居場所です。親子はもちろん、家族は互いに深い愛情で結ばれ、家族一人ひとりの心の拠りどころとなっています。

特に、子どもにとって家庭は、家族との普段の何気ない会話や親の態度・姿勢から多くのことを学ぶ場となっています。

また、親等の立場から言えば、子どもの発達段階に応じて日常的に行う私的教育の場、すなわち子どもへの家庭教育の場となっているとともに、子育てを通じた自己成長の場ともなっています。

家庭での教育は、すべての教育の原点であり、子どもの基本的な生活習慣・生活能力・食習慣、健康な心身の育成、食を大切にする心、自分がかげがえのない存在なのだという安心感、豊かな情操、他人に対する思いやりや慈しむ心、善悪の判断などの基本的倫理観、自己肯定感、自立心や自制心、責任感、社会的マナーなどを身につけるうえで非常に重要なものです。

このようなことから、家庭は、親子が共に育つ「共育の場」として理解することができます。

## (2) 地域活力の源

家庭を社会的見地から捉えると、子どもを社会の一員として育てる最小単位の集団であり、地域社会を構成する最も基礎的な組織であるということが出来ます。

かつて、家庭における高い教育力によって育まれた子ども達がやがて大人となり、地域の活力の源となっていました。

そして、活力ある地域は、一般の家庭はもちろん、困難や生きづらさを抱える家庭を見守り、そこに暮らす人々が、お互いを認め合い、助け合う地域社会を作り上げていました。

つまり、家庭が地域活力の源であり、活力ある地域が家庭を支えるといった相互補完的な仕組みが、良好な地域社会を支えてきたといえます。

## 3 地域の役割

地域は、そこに暮らす人々の人間関係を育み、豊かで安全・安心な暮らしを地域住民みんなの力によって作り上げていく場所です。

私たちが、地域を表現したり、区分したりする概念は、近所、隣組、町内、校区、地区など、様々あります。どれもが、私たちの生活を支えてくれる大切なものです。

### (1) 互いを支え、助け合う場

地域には、さまざまな人たちが暮らしています。そして、そこに暮らすすべての人々は、心豊かで幸せな暮らしを送ることを願っています。

自分の住まいを中心とした、近所、隣組等の概念の狭い範囲では、挨拶や玄関先の立ち話など、日常生活の中で自然に人とふれあい「絆」が生まれます。

ふれあいにより生まれた「絆」が、お互いの信頼関係を育み、多少のストレスを感じることはあっても、怪我や病気などの万一の場合や行事などの際には、お互いの家庭を気遣い、支え合い、助け合うことのできる、最も身近な存在であるといえます。

### (2) 家庭の協育の場

社会生活を営むうえで、防災や防犯、子育てや交通安全、生活環境、高齢者や障害者の支援など、生活に直結するような分野では、より大きな範囲で協力することが必要となります。

また、健全な心や体の育成、社会的なルールやマナーの学習など、家庭教育に加えて、学校や地域においても教育が必要な分野もあります。

このため、学校はもちろん、町内（区長）会や生涯学習推進会、子ども会やPTA、スポーツや文化、女性や高齢者などの各種団体や組織が、単独又は連携しながら様々な取り組みを行い、地域に暮らす家庭を支えています。

地域社会を構成する多くの組織・団体が協力して家庭を支えていることから、地域を、家庭の協育の場として考えることができます。

### (3) 郷土愛を育む場

人の歴史は、地域にも歴史を作ります。生活様式や時節の行事、特徴的な言葉使いや料理などは、長い年月をかけて、地域の文化や伝統、風習やしきたりとなって受け継がれていきます。

文化や伝統、風習やしきたりは、その地域に暮らす人々にとっては、最も身近で、居心地のよさ、安らぎをもたらしてくれます。それは、自分の育った地域を誇りや自信に思える大切なものです。

また、幼い頃から眺めてきた山、川、海、森や林といったふるさとの豊かな自然環境の中で遊んだ思い出は、地域にある有形無形なものを全部を含めて大切に思う心、郷土愛を育む場であるといえます。

## 4 家庭・地域の教育力の現状と課題

### (1) 家庭の教育力の現状と課題～家庭の教育力を低下させているもの～

「1 課題研究への取り組み」で述べたとおり、家庭と地域が抱える問題について、「子ども」、「親」、「家族間」、「地域」、「社会環境」の5つに類型化してみて、あらためて家庭の教育力が低下していることを認識しました。

挨拶ができない、深夜まで起きている、外遊びが少ない、道徳観の低下、我が子主義など、子どもや親の価値観や考え方に起因すると思われる問題が、実は、共働き世帯の増加、家族の生活サイクルの違い、母親の孤立化や子育ての密室化、父親の存在感の低下、携帯電話やテレビゲームの普及といった、地域や社会環境に起因すると思われる問題と、複合的かつ重層的にからみ合いながら、家庭の教育力を低下させていることがわかりました。

### (2) 地域の教育力の現状と課題～地域の教育力を低下させているもの～

都市化、核家族化や少子化といった社会環境の急速な変化は、個人の価値観やライフスタイルの多様化を進めました。さらに、産業のグローバル化や長引く不況は、経営の効率化、成果主義の導入、雇用環境の変化をもたらしました。

男女を問わず経済の担い手である現役世代にとっては、仕事の忙しさは増す一方で、心と時間の余裕がなくなり、地域への関心や活動への参加意欲を一層失わせる大きな要因ともなっています。

個人の価値観やライフスタイルを尊重することは、個人の満足感や幸せを考える上でとても大切ですが、地域への関心の薄さは、地域活動への不参加につながります。

地域の人々が、自分たちの住む地域のことを知らない、近所の人の名前や顔を知らない、地域の団体や組織に入らない・入りたがらない、指導的立場や役員の成り手がいない、いつも同じ人が苦勞しているなど、多くの地域で共通かつ深刻な問題となっています。

家庭を支える役割をもつ地域の不活性化は、地域の教育力の低下を意味しています。

### (3) 家庭と地域の教育力に関する専門機関の調査

家庭や地域の教育力の低下については、国や地方公共団体の行政機関をはじめ、民間の公益団体など多くの機関からも指摘されています。

平成20年3月、文部科学省国立教育政策所社会教育実践研究センターが発行した「家庭教育支援に係る地域の教育力に関する調査研究報告書」によると、20歳以上の男女3,000人のうち、8割以上の人々が家庭の教育力の低下を感じていると報告しています。

また、同報告書では、約8割の人が、家庭教育の支援に地域が積極的に関わらねばならないと考えており、地域が関わる主なものとして、「社会のルールやマナー」、「自然や命、ものを大切にする心」、「他人を思いやる心」を考えているとしています。

言い換えるならば、これらの地域力が関わるべき分野については、家庭教育だけでは不十分だと感じていることがわかります。

さらに、地域活動への参加意識についても調査しており、現在、地域活動に参加している人の8割以上の人々が今後も活動に参加しようと考えており、地域活動に参加していない人においても、5割以上の人たちが、今後地域活動に参加してみようと考えていると述べています。

そして、参加しようと思う活動については、「地域の人や親子がふれあい、交流する活動」、「子どもたちの文化やスポーツ活動」、「子どもたちの自然体験活動（自然観察活動、キャンプ等）」、「異年齢の子どもたちがふれあい、交流する活動」など、子どもや親子のふれあい、交流、体験をあげていることがわかりました。

いずれにしても、地域活動への潜在的な住民の力が、まだ十分に引き出せていないことがわかります。

## 5 地域の教育力を高める方策

### (1) 地域の教育力を高めるための視点

これまで述べてきたように、地域の教育力は、複合的かつ重層的な問題によって低下しています。これらの問題を一朝一夕に解決することは非常に難しいといわざるを得ません。

しかし、私たちの議論や専門機関の調査から、地域活動に参加する気持ちを持っている人は、少なからずいることがわかりました。

このため、私たち社会教育委員は、次の視点を忘れずに地域活動を展開することを提案します。

#### ① 楽しい活動

地域を活性化させるためには、一人でも多くの人々が、地域の団体に加盟したり、活動に参加したりすることが求められています。多くの地域住民、特に、現役世代は忙しさのあまり、活動への参加意欲は低くなります。

このためには、何より活動が楽しくなくてはなりません。参加してよかった、参加して楽しかったなどの気持ちが、次の活動につながります。参加者はもちろん、企画・

運営する役員までもが楽しい活動を続けることで、徐々に参加者が増えていきます。

また、子どもの頃から地域活動に参加すると、大人になってからの参加が期待できます。特に子ども対象の行事で、子どもも大人も楽しい活動にすることが有効です。

ゆっくり、じっくり、遊び心のある楽しい活動を続けることが重要です。

## ②出合いの場の創出

近年は、昔に比べて、子どもが、身近で自由に遊べる空間が少なくなってきたのではないのでしょうか。

塾や習いごとなど、子どもの時間的制約や、仕事量の増加、共働き世帯の増加といった大人の制約、交通事故や犯罪に巻き込まれる心配などの社会的制約により、子どもも大人も、地域の人たちと関わる機会が少なくなってきました。

このため、地域の人々が、身近で、気軽に交流できる場を意図的に作り出していく視点が大切です。

## ③個人の意識改革

個人のライフスタイルや、それぞれの価値観を尊重することは、とても大切です。

しかし、他人を省みない自己中心的な意見もあるなど、集団として一つの目的を達成するために、克服しなくてはならない多くの課題を生み出しているのも事実です。

このため、まず、一人でも多くの人が、お互いを理解し、感謝し、思いやり、譲り合う意識を持つことが求められています。

私たち一人ひとりが、個人であるとともに地域の一員であるという意識を持つために、様々な活動を通じて意識啓発することが必要です。

## ④様々な主体の意識改革

個人が地域活動に参加するためには、個人の意識だけではなく、その人が属している様々な主体、例えば、企業や組織、上司や同僚などの理解や協力が必要です。

子育てや地域への貢献が、個人や地域のためだけでなく、企業や組織のためにもなっていることを理解してもらえるように、様々な主体に働きかけることが求められています。

## ⑤親子・親・子の居場所づくり

繰り返しになりますが、時間的制約や社会的制約により、地域の人々のつながりが希薄化しています。親と子のつながり、親同士のつながり、子ども同士のつながりなど、同じ境遇の者同士のつながりを再構築する視点も大切です。

同じ境遇の者同士が、出合い、語り合う居場所づくりにより、悩みや喜びを共感できる地域となります。

## ⑥学校教育への保護者や地域の人たちの参加

学校は、生徒・児童の学びや活動に関して、多種多様な場面で地域の力を求めています。

また、保護者や地域の人たちの多くは、学校を地域の大切な場所として、尊重し、愛しています。子どもたちや学校の役に立ちたいと願っています。

しかし、最近の風潮として、一部の心無い人が、本来、家庭で行われるべきしつけなど、学校に過度の負担を押し付けている事例も見受けられます。

学校教育の立場を尊重し、教員等に過度の負担を求めることなく、学校を地域の大切な場所として、保護者や地域の人たちが学校の活動に参加できるようにすることが必要です。

地域の人々の力をどのように学校教育の支援に結びつけていくか、しっかりと考える必要があります。

## ⑦社会教育団体等の横の連携

新しい取り組みを行うには、多くの労力と時間が必要です。

地域に活力を取り戻すために、安易に新しい活動に取り組むことは避けたいところです。

「資料2」にあるとおり、すでに市内では、各地域で様々な活動が行われています。

このような中であって、地域にある社会教育団体やその他の団体の横のつながりを密接にすることも、地域全体の活性化のためには必要です。今まで、あまり交流が行われていない団体が連携することで、団体の活動に刺激をもたらすとともに、新しい発想や展開が期待できます。

また、他の団体の人たちと交流し、新しい知識や考え方を学ぶことは、人材育成や人材発掘の観点から重要です。

団体を結ぶ役割は、行政など、情報が多く集まる組織に期待される役割です。

## ⑧リーダーの役割のスムーズなバトンタッチ

地域活動に、リーダーや団体役員等の指導的立場の人は欠かせません。

しかし、この種の問題で必ず指摘されるのが、担い手不足、後継者不足の問題です。

この原因の一つに、指導的立場の方の役割、実施する内容や配慮することなどの引継ぎ事項について、スムーズにバトンタッチがされていないことがあげられます。

引き継ぎが上手にいかないと、次の引き受け手は不安になるばかりでなく、充実感や達成感を得る前に、心配や気苦労に襲われます。

このため、指導的立場のリーダーや団体役員等は、明確かつシンプルに記録を残す必要があります。記録の仕方等のノウハウを学ぶことが必要です。

実際の地域活動に役立つ知識や技術の習得は、先の提言書（H22.3）にある、まさしく「地域行動学科」です。今後、地区のまちづくりセンターなどの講座で積極的に取り組むことが求められます。

## ⑨新たな人材の発掘

活動の担い手やリーダーの役割を担える人は、地域の中に必ずいます。人材不足とは、情報の不足と考えるべきです。

新しい人材の発掘のため、現在ある「人材バンク」の効果的な活用についても検討する必要があります。

また、地区まちづくりセンターは、地域の人材が集う場所です。人材情報の集約や発信の役割を担う施設としても期待されます。

## ⑩人材の育成

次のリーダーを活動の中から育てる視点も大切です。先輩リーダーは、率先垂範を心掛けるとともに、後輩リーダーを温かく見守りながら、一緒に活動することが必要です。

次のリーダーを育成するため、立場と権限を移譲することを心掛ける必要もあります。

## (2) 家庭の教育力向上のための「理想的な地域の取り組み」

### ①地域ぐるみで子どもを育てる「ふれあい子ども教室」の実施

《説明》

富士市では、小学校区ごとに設置されているまちづくりセンターを主な活動拠点として、教育委員会社会教育課と市長部局のまちづくりセンターが連携し、「放課後子ども教室事業（※1）」を実施しています。

現在、この事業は、放課後や週末などに、子どもたちが安全で安心して、健やかに育まれるよう、映画の鑑賞会、絵本の読み聞かせ会、工作教室や料理教室など、まちづくりセンターの職員や、地域の方々が講師を務めるなどして開催されています。

まちづくりセンターは、「まなぶ・つどう・つなぐ」という理念のもと、各種講座を開催したり、地域住民による主体的なまちづくりを支援したりする機能をもっています。

このため、町内会組織や生涯学習推進会を初めとする地域の団体で活躍する住民とともに、主催講座で知識や技術を習得した受講生、主催講座から独立して活動している自主グループの参加者など多くの人が集っています。

このようなまちづくりセンターの利点を活かして、地域の人材を活用しながら事業を実施していることは評価できますが、教室の開催にあたり、講師等の人材確保に苦慮しているまちづくりセンターも見受けられます

このため、現在の「放課後子ども教室」に地域の人たちが気軽に足を運び、子どもたちが、一人でも多くの大人と話しをしたり、遊んだりすることのできる、もっと身近で、気軽に交流できる場としても活用していくことを提案します。

例えば、名称を「ふれあい子ども教室」にするなどもイメージを変える一つの方法です。

現在の「放課後子ども教室」では、工作や料理などのプログラムを用意して、子ども

たちが、そのプログラムに沿って実施する機会が多いと思われませんが、すべての回にプログラムを用意する必要はありません。

「ふれあい子ども教室」は、地域の高齢者などが、気軽にまちづくりセンターにきて、囲碁や将棋を子どもたちと一緒に楽しんだり、昔の遊びを教えたり、一人でも多くの方が参加して、子どもとふれあうことを第一の目的に実施します。

また、地域では、インリーダー、ジュニアリーダー、シニアリーダーが活躍しています。さらに、今年度、青少年の船で、指導的立場を経験した青年たちが、青少年教育事業の実施や支援をする自主サークル(※2)を立ち上げました。

そのような青少年たちに、「ふれあい子ども教室」で、地域の大人と子どもをつなぐなどの役割をお願いするのも一つの方法です。

いずれにしても、地域の大人と子どもをつなぐ場として、既存の事業を一部見直して実施することで、新しい展開が期待できます。

子どもたちと、地域の人々のふれあいは、地域力の向上の契機となるでしょう。

※1 国が、放課後等に子どもが安心して活動できる場の確保等を目的として策定した「放課後子どもプラン」に基づく事業。

地域社会の中で、文部科学省の「放課後子ども教室推進事業（放課後子ども教室）」と厚生労働省の「放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）」を一体的あるいは連携して実施しようとするもの。

本市では平成22年度から、市内のすべてのまちづくりセンターで、概ね月1回程度開催している。

※2 「青少年の船」の指導員やグループリーダーを経験した青年たちが組織したグループ『富士市青少年指導者の会「ふじまる」』。

「ふじまる」のメンバー全員が、青少年の船の下船後、約1年間の青少年指導者養成講座を経て、静岡県青少年指導者（中級）資格をもつ、青少年指導のセミプロ集団。

## ②「通学合宿」と「子育て勉強会」の同時開催

《説明》

通学合宿とは、学年の異なる小学生が、地域の宿泊可能な施設を拠点として、家庭から離れ、共同生活しながら学校に通学するものです。子どもたちが協力しながら自分たちの力で生活体験することで、親に甘えず自立し、お互いの立場を理解し助け合う心をはぐくむことを目的としています。

また、子どもたちの主体的な活動を支援する立場で“地域の大人たち”が協力することにより、大人同士の結びつきを強めるとともに、地域全体で子どもをはぐくむ意識を高めることも目指しています。

富士市でも、数年前から実施されているこの通学合宿をコア事業として、家庭の教育力向上のための地域の取り組みを提案します。

まず、通学合宿は、参加した児童が楽しみながら集団生活を送るとともに、自分たちの身近な先輩である地域の若いリーダーを知るため、ジュニアリーダーとコラボレーションして実施します。

そして、子どもを通学合宿に参加させている保護者は、普段の子育てから解放され勉強会に参加しやすい状況になると考えられるため、合宿期間中に家庭の教育力向上に直結する事業として、参加児童の保護者等を対象にして「子育て勉強会」を開催します。

既存の事業にこのような事業を組み合わせることにより、より大きな効果が期待できます。

以上、小学生、ジュニア世代、親世代、祖父母世代が一体となって通学合宿を実施することを提案します。

### ③「地域の大人と小・中学生が語る会、幼児と親を含んだ交流会」

《説明》

地域の伝統や歴史を学びながら、地域への愛着心を育てるための「地域の大人と小・中学生が語る会」の開催を提案します。

大人と子どもがお互いを知るために、保護者と子どもの交流に加え、地域の大人と楽しく交流できる企画を盛り込みます。地域のジュニアリーダーやインリーダーなど、子ども会と連携することにより楽しい交流も期待できます。

また、子育て世代が参加しやすいように、中学生の保育体験をかねて託児をまかせるなど、幼児も連れて参加できるような工夫も必要です。

交流会の範囲は、小学校区や中学校区単位で実施できれば良いのですが、企画・実施をする運営側に負担がかかる可能性があるため、形式にこだわる必要はありません。

まずは、町内会単位で地元の公会堂を使って行うなど、まとまりやすい単位で行う方法もあります。

## 【おわりに】

今期の研究課題『家庭教育を支える地域の教育力向上のための方策』は、非常に難しいテーマでした。悪化する経済状況、少子化や高齢社会の到来など、本来、家庭や地域だけで解決できない要因も大きく関係しているからです。

しかし、簡単に解決できない問題だからといって先送りするわけにはいきません。

なぜなら、私たちの地域生活に直接的に大きな影響を及ぼす問題だからです。

本意見書は、地域の様々な活動を支える私たち社会教育委員が、自ら率先して取り組まなくてはならない問題として会議を重ねてまとめたものです。

教育委員会だけでなく行政の全体がこの意見の主旨を汲み取り、地域の教育力を高めるための視点を留意しながら、市内各所、各領域において、様々な施策を幅広く展開されることを希望して、今期の社会教育委員の意見といたします。

家庭が抱える問題の類型化

資料1

子どもの問題	家庭の問題		地域の問題
	親の問題	家族間の問題	
<b>■マナー、道徳、生活習慣に関する事項</b> ・あいさつを親の前、学校ではできて他ではできない。 ・挨拶、ありがとう、すみません、ごめんなさいが言えない。 ・横柄な言葉使い。 ・履物・靴、人の家庭を訪問したときの揃え方、脱ぎ方 ・親の手伝いをあまりしない。 ・深夜まで起きている子どもが多い。 ・テレビ、ゲームに夢中。外遊びが少ない子ども ・カラオケが好きで、一日中居る。 ・コンビニエンスへの出入りが多くなっている。	<b>■マナー、道徳、生活習慣に関する事項</b> ・ありがとう、すみません、ごめんなさいが言えない。 ・親の道徳観の低下 ・子どもを叱れない大人が増えている。 ・自分の子が世話をやかれると怒り出す親 ・履物・靴、人の家庭を訪問したときの揃え方、脱ぎ方。 ・お手伝いをさせない。(経験が少ない) ・朝食抜き。孤食の増加 ・平日の夜11時過ぎに、子連れで買い物 ・家族各々の生活サイクルが違う。	・家庭内であいさつができない。中・高生が多い。 ・家族間のコミュニケーションが少ない。 ・親子で遊ばない。(車で連れ出し満足する親) ・祖父母と同居でも食事は別、話す機会が少ない。 ・家族の絆ができていない。 ・家庭においての個人を尊重してしまう。 ・核家族、共働き、子どもと接する時間が少ない。 ・地域、社会、仕事に追われ余裕がない。 ・親の収入をあてにして仕事に就こうとしない子ども。 ・自分の家の問題を外に出したくない。	・親同士の交流が少ない。 ・子ども同士の関わりも少ない。 ・親同士の仲が悪いと子ども同士も仲が悪い。 ・近所の子どもの名前を知らない。 ・近所付き合いのわずらわしさを感じている。 ・猫が庭等に入ってきてても嫌と言えない近所付き合い。 ・身近に子育ての先生となる先輩がいない。 ・お年寄りに相談したいが、タイミングがわからない ・子どもと大人、老人とのふれあいが少ない。 ・住んでいる地域のことを知らない。 ・子ども達の活動に関する地域の理解が不足 ・地域の行事に参加しない。 ・地域の祭りなどの参加は各家庭で差がある。 ・地域主催の防災訓練等を嫌がる人。 ・仲間意識が強く他者を受け入れにくい。 ・自分の住む地域での活動が少なくなった。 ・昔と違って、遊び方、仲間作りが変わった。 ・地域を知らない。
<b>■個人の内面に関する事項</b> ・集団での活動がうまくできない(人との関わり方が下手) ・協調性に欠けている。(後片付けに参加できない) ・誰に相談していいのかわからず自分だけで悩む。 ・暴力的になってしまう。 ・落ち着きがない。 ・怒られると動揺する。 ・我がまま、子どもの耐性の不足 ・他人の持っているものを持っていないと不安 ・問題行動のある子が以前より増えた。 ・友人と一緒にできるが、一人では外へ出られない。 ・一生懸命は恥ずかしい(友達の目が気になる)。	<b>■個人の内面に関する事項</b> ・親がまず自分を一番に考える。(自分勝手) ・問題に気がつかない親(自分のやるのが当たり前) ・人の話を聞かない。 ・利己主義(自分だけ、うちだけ良ければ・・・)		
	<b>■子育てに関する事項</b> ・正しい躰、教育ができない。子育てへの迷い。 ・過保護や過干渉 ・育児放棄の増加 ・子どもの交友関係を把握していない。 ・誰に相談していいのかわからず自分だけで悩む。 ・育児の仕方などネット情報に頼りすぎている。 ・母親の孤立化、子育ての密室化 ・親は子どもの言いなり(子どもが我がままに育つ)。		
	<b>■夫婦に関する事項</b> ・父親と母親の役割が不明確。責任を片方に負わず。 ・両親の意見を合意できない(しつけなど)。 ・親の仲が悪いと子どもも仲が悪い。		
<b>社会環境等の変化</b>			
<b>■社会通念の変化、影響等</b> ・価値観の多様化 ・勉強さえできれば良という風潮 ・子どもの習い事が多すぎ。家族で過ごす時間が少ない。 ・地域より、子どものグループの活動を優先 ・社会風紀(異性との関わり、タバコ)の乱れ ・精神(心)よりは物を大切に社会全体の風潮 ・環境に興味、関心が薄い。 ・学校教育と社会教育の連携 ・社会問題(不登校、ニート、引きこもり、性や暴力等)	<b>■家族構成、家庭の変化、影響等</b> ・少子化。すぐ近所に同年代がいない。 ・核家族が増え、相談する人が身近にいない。 ・未婚、晩婚。子どもを生まない夫婦。 ・高齢者世帯の増加(同居でも居場所がない。) ・母親の孤立化、子育ての密室化 ・乳児を外に連れて遊ばせる場所がない。 ・放課後、自由に遊ぶ場、人と関わる場がない。(安全面) ・家庭内の問題をどこに相談するか分からない。	<b>■産業技術の変化、影響等</b> ・携帯電話の普及。高校約100%、中学生50%、小学生29% ・テレビ、ゲームの普及。外遊びが少ない。 ・一人の空間(ゲーム・携帯・i p o d)の増加 ・有害情報の氾濫 ・子育て情報の氾濫から悩める母親が増加 ・テレビの報道に左右される。その時だけですぐ忘れる。 ・メールの中で考え行動しやすい。 ・ゲーム感覚で生きている。	<b>■雇用環境の変化、影響等</b> ・不況で深夜まで働く親 ・共働きが多い。 ・母子家庭では、子どもに向かい合う時間が少ない。 ・忙しすぎて余裕が持てない。 ・食う、寝る、仕事の生活 ・社会構造の変化、雇用環境の変化、都市化の進展 ・生活不安(金銭面)

地域教育力の向上につながる取り組み事例

資料2

No	事業名	取り組みのきっかけ	取り組み内容	効果	課題
1	各地区の祭り(雨乞い曼陀羅・火祭り)	各地区の伝統	・小学生、中学生を核に置いた構成。子どもが中心でもある。	地域を誇りに思う気持ちと、大人社会の仲間入りの気持ちを高める。	より多くの子どもを参加させるためには・・・。
2	三世代交流(グランドゴルフ・カップスタッキング・交通安全)大会	・特定の年齢層に片寄ることなく、三世代が共に楽しめるように。	・大会当日に集まった人たちの中から、三世代でグループ(チーム)を作り、ゲームを楽しむ。順位により景品有り。	・初めて顔を合わせたり話しをする方ともグループ(チーム)を組むこともあるが、ゲームを共にすることで会話がはずむ。	・神戸地区には多くの行事があるが、参加する方が限られているような気がする。より多くの方が参加し、コミュニケーションを交わす場を持てると良い。
3	子ども天国(神戸)	・5月の連休中はお茶の季節の為、農家は子どもを連れて出かける事ができない。そこで、30~40年程前から子ども達が1日遊べるように、地域で5月5日に行われるようになった。(地区青年団、子ども会、PTA等)	・子どもの遊び、ゲーム等は参加無料、食べ物は有料で、1日子どもが主役となって遊んでいる。小学生が中心だが、幼、保、中学生も参加。(生涯学習、子ども会、PTA等が準備)	・小学生の85%~90%が参加し、その保護者、祖父、祖母の参加も多い。お互い声を掛け合い、強制されたものではなく、自由参加なので、無理がなく交流も深まっている。	・連休中の行事なので、それぞれの家庭の行事とバッティングしているのではないか。
4	まちづくりセンター高齢者学級	・講座の中に、異世代の交流親睦を取り入れたかったため。	・地元小学校に協力を依頼し、講座時間内に来館し、高齢者と子ども達との交流を計る。内容は、昔の遊びだったり、もちつき、まゆ玉作り等内容の中に由来を含め、お年寄りから子どもへ、子どもからお年寄りへ伝えるものを入れるようにしている。	・子ども達が〇〇ちゃんのおじいちゃん、おばあちゃん、近所の人を発見したりして楽しそう。 ・体験(昔の遊び、由来)発見有り。	・高齢者が、もう少し積極的に意見を言うなど、関わって欲しい。
5	富士川ガイド協会	・旧富士川商工会まちおこし委員として観光部会に所属。富士川町の歴史、文化を伝え、富士山の景観日本一をうたい文句に「富士山と歩く」のパンフを作成。富士川地区ボランティアガイドとして活躍している。	・地域内外からの依頼を受け、「富士川岩淵間宿」のガイドを実施。富士川楽座との連携でまちおこしを推進している。	・自分自身が地域の歴史について学ぶことができた。 ・地域のいろいろな人と仲間になれた。 ・ふるさとに誇りを感じることができるようになった。	・会員の減少化 ・活動費の確保 ・会員の増強
6	町内子ども会	—	年間を通して異年齢の交流の機会を作る。(歓迎会、夏祭り、ドッジボール大会、秋のみつけた会、クリスマス会、ゲーム大会、送別会等)	・町内の子どもを知ることができる。子どもを知ることにより親も知り、その中で役員を行うことで更なる親同士の結びつきもできる。	・その年ごとの役員の取り組みかたにより子ども会の活動内容が大きく変わってしまうこともある。
7	地区文化祭	・地域活動へ子どもを参加させたいという学校側の願いがあることを知って。	・中学生に販売コーナーを手伝ってもらう。 ・中学生に仕入れから販売までの責任を持たせ、店をまかなわせる。	・生き生きと地区の大人と話す姿がみられた。 ・大人側にも緊張感がでた。 ・中学生は・・・とマイナス面をみていた人達から「普通だね」という声が出ていた。	・学校からの指導がなくても参加してくれたか。
8	地区防災訓練	夏祭り、文化祭に中学生の参加が増え、高校生も防災訓練には必要な力であることに気づいてきた。	・消火訓練、炊き出し(おにぎり作り)を指導者と共に行う。	・子どものやる気を見直す大人が増えた。	・学校との連携
9	読みきかせの会	・図書館(市)からの委託事業	・月に1度、まちづくりセンターを会場に幼児相手の読みきかせの会を開いている。	・他の参加者との交流が持てる。(情報交換) ・友達が増える。	・参加者が大変少ない。 ・広報が弱い。
10	少年交流事業	・地元の住民からやって欲しいとの依頼があった。	・少年教育の事業の中で、地元住民を講師に迎え、ナン作りや竹炭アートを体験した。	・地元住民と子ども達の交流の場となっているボランティア講師が子ども達のためにという気持ちが強く、それが子ども達にも伝わり、まちづくりにつながっていると思う。 ・文化祭にも出品し、発表の場を設けており楽しみ。意欲の向上にもなっている。	・何かにつながっていくといいと思う。
11	「託児有」のセンター講座	・子どもがいるので講座に出られないという人がいて。	・子どもを預かるためのおもちゃやDVDなどを準備し、託児ボランティアをお願いした。民生委員・児童委員にも声をかけ託児をお願いした。	・おじいちゃん、おばあちゃん、たまになら楽しいと集まってくれた。	・「けが」などあったら・・・。保険は・・・。
12	センター講座 ママとベビーのボディケア	・産後赤ちゃんを連れて出かけられる場が少ないと聞いて講座を作る。	・赤ちゃんを自分の側に置き、又は抱いてできる運動を行う。 ・忙しくなり見失いがちな点を仲間と考え語り合う。	・母親が友達を増やし安定した生活を送れるようになった。	・回数が少ないので、いつでも利用できるわけではなく、子育て支援のトライアングルなどを紹介している。しかし、ただおしゃべり、子守りだけではやりがいを感じられない。

地域教育力の向上につながる取り組み事例

資料2

No	事業名	取り組みのきっかけ	取り組み内容	効果	課題
13	「まゆ玉づくり」 ( 駅北地区 )	—	・家庭教育学級に参加している親を中心に、地域の方達にも協力を得て、まゆ玉づくりをする。	・若い親がまゆ玉の意味を知り、地域の人達との関わりを持つ。	・センター等で行うことだけになってしまう。 ・家庭において、自分から行うことはない。
14	絵本の読み聞かせ ( おとぎの部屋 ) ( 須津小、中、読み聞かせグループ )	・読書ばなれから。 ・小さな頃より本に親しむ機会づくりのため。	・まちづくりセンターにて月1回(第2土曜日)、地域の子供達対象に絵本の読み聞かせ、工作等を行う。 ・小学校は月1回、朝10～15分間、中学校は選択科目、国語の授業等で行う。	・子ども達に読書の習慣がついてきた。(本が好き、図書室の利用数も増したとの事) ・朝の読み聞かせを行うことにより、授業に落ち着いて入ることができる。	・学校の先生が変わることにより、読み聞かせの回数が変わる。 ・富士市全体的に読み聞かせグループの年齢層が高くなってきている。
15	NPO法人富士川っ子の会の活動・事業の推進(生涯学習)	①地域のミニコミ紙編集に関わっていた(地域の人が見えていた) ②県の人づくり推進員の依頼を受け推進活動を実施。 ③地域(当時は富士川町)に人づくりネットワークを作りたいという願いを込め、県の「子どもをはぐくむ地域教育推進事業」に着手するため、コンソーシアム「地域教育推進協議会」を立ち上げ、富士川っ子の前進、富士川っ子が育つ会を設立。 ④6年を経過、富士市との合併を前に平成20年2月1日「NPO法人富士川っ子の会」とし、その時点より地域の生涯学習の場として活動している。	①主事業は「自然を生きる」を理念に富士川っ子エコクラブを毎月第3日曜日に実施。 ②エコクラブを通し地域交流事業、生涯学習、野外体験、異文化体験、食農、食育事業等を行っている。 ③地域で活動している他団体との交流ネットワーク事業では、地域全体で取り組む次世代育成事業として活動している。	①活動歴9年目に入り、地域での知名度、認知度も高くなり、子育て中の親の信頼も得られるようになった。 ②学校との連携がスムーズに行くようになってきている。 ③地域の企業の協力が得られ活動の輪が広がってきている。 ④行政との連携による信頼の確立。 ⑤富士川っ子が次世代の富士川っ子を育てる取り組みになってきている。	①会の立ち上げからまもなく10年になる。スタッフ会員の若返りを推進したい。(人) ②NPO法人としての力をつけ恒久的に活動できるよう、有償ボランティアの格付けをしていきたい。 ③NPO法人としての事業展開で活動費の確保を図りたい。(金) ④事務所の確保。(物) ⑤専門職的技能・技術の向上。
16	少年少女合唱団	・合唱音楽を盛んにすると同時に、合唱を通し音楽の喜び、美しさを味わい、皆で作り上げる楽しさを分かち合う。 ・美しい音楽から言葉の美しさも学び、美しい心を養う。 ・富士市には児童合唱グループがないので、教育委員会の指導のもと出来た。	・合唱練習、オペレッタ、ミュージカルを体験 ・作者(作曲家、作詞家)から直接話しを聞く。 ・プロフェッショナルな指導者から歌い方、振り付け、芝居について指導を受ける。 ・親子で受講する。 ・舞台の大道具、小道具を親子で作製 ・卒団したメンバーが後輩を指導補助で参加する。	・年齢層の異なる(年長児から高校生まで)子ども達が心を一つにして仕上げる喜びが感じられる。 ・姉妹、兄弟のいない子どもにとって、いたわりと尊敬の気持ちを持つ機会となっている。(合宿、演奏旅行等では特に体験できる) ・ライバル意識を持たず、気軽な気持ちで参加できている。 ・親子で作りに上げていく喜びを味わえる。(特に舞台作り)	・他市、県内外、海外とも交流し、親善演奏も体験し、広く活動できることも希望している。
17	富士南地区三世交代交流集会	・世代を超えた人と人とのつながりをつくる。	・親子での凧揚げ・地域の老人の指導による大凧つくり・出店	・親子、特に父親と子どもと一緒に遊ぶ機会を作る。 ・高齢者による凧作りの指導など、世代間交流ができる。	・回数を負うごとに参加者数が少なくなっている。特に大凧つくりの参加者が少ない。 ・企画・運営が地域の高齢者中心のため、新たな取り組みの提案が出にくい。 ・グループ活動が日常的にあって、その発表の場としての交流集会であれば、もっと多くの人が参加するのではないかな。
18	富士南地区文化祭	・地域の文化向上(?)かつての成人学校などの流れか?	・まちセンの講座や自主グループなどによる作品の展示や練習成果の発表	・学んでいる人にとっては、学ぶ目標となっている。また、技術等の向上につながっている。 ・参観者や観衆の交流や学ぶきっかけ作りに繋がっている。 ・地域の人々の交流作りに繋がっている。	・運営が大変 ・マンネリ化、同じグループ、同じ人々の参加
19	春堀り	・田植え前の用水路の整備・清掃?	・用水路の整備・清掃	・人的交流 多分、隣家の住人等と言葉を交わす年に1度の機会かもしれない。春堀りや地域の清掃活動などがないと、隣人が誰だかわからないのではないかな。	・かつては春堀り後、懇親会などが組まれ、より親密な関係をつくっていたことと思う。現在は堀をさらに、言葉を交わすこともなく、自宅へ戻るだけ。
20	ポレポレ子育てサロン	・地域の子育て中の親から、子どもと楽しく遊べる場所を作って欲しいという要望があり、まちづくりセンターを会場に開いている。	・本の読み聞かせ、紙芝居、ペープサート、リトミックなどを中心にベテランの元幼稚園の先生を講師に第1、第3金曜日に、10時～11時半まで開催されている。主催は、民生委員児童委員協議会。	・未就園児(0～3歳)の子どもを対象にしているが、親子の1対1で暮らしていた引込み思案の子どもがみんなと仲良くなったり、親が子育ての悩みなどを話し合うことができる良い場所になっている。	・親御さんからの相談にはメンバーが対応しているが、専門的な内容については、専門家につなげる役割をしているので大きな問題はないが、関わるメンバーのステップアップのため、研修できるプログラムが欲しい。

地域教育力の向上につながる取り組み事例

資料2

No	事業名	取り組みのきっかけ	取り組み内容	効果	課題
21	紙ふうせん文庫	・子ども達に本の楽しさを通して仲間づくりをして欲しい。 ・親子で参加することで、スムーズな親子関係を作りたい。親同士が知り合いになって欲しいという思いでスタート。自分自身の生き方を考えたことがきっかけ。	・毎週土曜日、9時30分～12時、本の読み聞かせ、工作作り、紙芝居、折り紙など、楽しい雰囲気の中で、異年齢の子どもがふれあうような内容。	・親同士が仲良しになり、1対1の親子関係から、地域の人とのつながりができている。目的とは違わないが、子育て支援の1つの方法として考えられるようになり、土曜日の午前中は、兄弟の多い家の子が病院へ行く時など預かるようになった。	・資金がゼロなので、地域の人々のボランティアで開催されている。少し資金面でのサポートがあればよいと思っている。現在のおばさんたちが関われなくなったとき、次の世代の人が引き継いでくれるかが不安。
22	オフ会	・ブログで知り合ったママ友が月1度、子ども（0～2歳）を連れて集まるようになった。 ・同年齢の子を連れて遊ばせたい。 ・育児の悩みや自分の事を話したい。	・午前中おもちゃ図書館や公園で一緒に遊ぶ。 ・絵本や紙芝居を図書館で借りてきて読む。 ・その日の当番が絵本を読んだり、ゲームを考えて一緒に遊ぶ。	・親同士が仲良くなる。 ・人と関わる力が小さい時から経験できる。 ・いろいろな人の価値観があることを知る。	・地域の限定がない。（広範囲） ・とすれば仲の良い親同士が固まり易い。 ・10組ぐらいの親子が集まれる場所が少ない。（室内）おもちゃ図書館が一番人気あるが予約が取りにくく、夏休み冬休みは特に予約できない。 ・しつけ面で親同士の意見が違う面が出てくる。（悪いことをしても叱らない親に思いが伝わらない） ・会をしきるのも嫌だが、しきられるのも嫌（自由にやりたいようにしたい面もみられる）
23	子育てミニカレッジ	・県のコンソーシアムの募集に応募してパスしたのをきっかけに、子育て中の親に、楽しみながら社会性を育てて欲しいという思いで取りくんだ。	・季節ごとの工作作り（七夕祭り、クリスマスグッズ作り）などを通して、地域のお年寄りや元教師などの力を借りて講師になってもらっている。	・昔ながらの行事を知らない親子が楽しい工作作りを通して、昔の行事などを知ることができると同時に、地域のお年寄りとも知り合いになれる。	・夏休みや土曜日の午後の開催だが、子ども達の行事が多すぎて、なかなか参加できなくなってきている。
24	地域のおじいちゃん、おばあちゃんと遊ぼう会	・核家族化が進みおじいさんやおばあさんと触れ合う機会が極端に少ない。 ・昔の遊びを通して幼児が触れ合う機会を増やす。	・昔の遊びを一緒にする。こま回し、めんこ、あやとり、お手玉、竹馬、ケン玉等 ・昔話やわらべ歌、童謡を聞いたり歌ったりする。	・人の温かさに触れる。 ・受容される喜びを知る。 ・家族で子どもと触れ合う時の参考になる。	・子育て中の母親（特に乳児を持つ親）に回覧板等で知らせてもなかなか参加できない。 ・遊ぼう会を開ける場所が少ない。（幼稚園、保育園を借りる） ・立ち消えになっている。
25	放課後子ども教室	・小学校の放課後子ども教室の計画・立案。	・小学1・2年生対象。物作り教室、独楽作りの体験 ・地域の「自然遊びの達人」に講師を依頼	・身近なものから物を作る。楽しさを体験しながら学ぶ。素材、牛乳パック、どんぐり、割り箸、ビー玉、紙バンド等 ・講師、子どもが地域内で仲良く。	・今の子どもは体験、実践的な体験学習が少ないので、支援、指導していく機会を作る。
26	体験不足を補う教育プログラム	・バーチャル的な事が多い時だけに現実的な体験を通じたことが少ない。教えていく事を通じて覚えさせる教育が大事だ。 ・親が子どもと一緒に遊ばない。	・ボーイスカウト等のプログラムを通じて、体験学習させていく。 ・野外活動を通じて自然や人間関係を学ぶ。 ・昔から行われていた体験的な活動を地域で組み立て実施する。 ・親が子どもと一緒に体験的な事をする。	・体験を通じて本物をわからせる ・歴史や地域、技術を習得できる。 ・親と子の「絆」が強くなる。親を尊敬するようになる。	・大人がその気にならないとだめ。 ・指導する人を育てる。 ・地域でそのきっかけを作る場を設定する。 ・意図的に体験するプログラムを作る。
27	ポテトの会	・まちづくりセンターの青少年教育に参加した子ども達の親が、何かの役に立ちたいと「布の絵本づくり」を始めた。	・布の絵本やタペストリー、すごろくなどを作り、子ども達と遊んでいる。	・親子でやわらかい布の絵本で遊ぶことで、暖かい雰囲気になれ、親子のコミュニケーションが豊かになる。	・関わっている人（作成者）が高齢になってくるので、どのように若い人につないでいくのが課題
28	外国籍児童への学習サポート	・「外国籍児童が、学校の授業だけでは身に付きにくい学習を、地域のボランティアでサポートしていくのはどうか。」という県の働きから始まった。（現在は市、国際交流室）	・土曜日の午前10時～12時に、外国籍児童とボランティアと市国際交流室の職員が、まちづくりセンターに集合し、児童の持参した学習教材と一緒に考え解く。	・地域の人、ボランティア、一部、外国の方もいる中で、親や親の親戚知人以外の人との交流が計られる。（児童） ・ボランティアは、外国籍の子どもへの理解が深まる。→声かけがしやすくなる。 ・子どもの親も巻き込める。	・ボランティアの確保 ・日本語を教える難しさ。（慣れるという事につきるのではあるが） ・あまり勉強が好きではない子への対応の仕方
29	「あそぼう」の会	・地域の行事に参加していて、子ども達がお金を使わないと楽しめない事が多い・・・と気づいた。	・ふれあう、考える、無料を基本理念に地域行事のお祭り、小学校のふれあい祭りに出店。無料の工作遊びを行っている。	・子ども達が楽しみに来てくれるようになった。 ・子ども達が創意工夫をしながらスタッフと話している姿が見られる。 ・子どもから、あの時の人と知り合いになれたという声があった。	・出し物の工夫、勉強。スタッフが忙しい。

地域教育力の向上につながる取り組み事例

資料2

No	事業名	取り組みのきっかけ	取り組み内容	効果	課題
30	中学生と語る会	・地域の大人と子どもが顔見知りになり、挨拶を交わすなど、多くの大人が地域の子どもの見守る必要性を感じたことがきっかけ。(27年前から実践している)	・中学生と大人が自己紹介をしあう。今年の場合、中学生7名と大人5名くらいのグループに分かれる。 ・話し合い。 (1)吉原北中学生の様子をみて(登下校、卒業式、運動会での生徒の様子) (2)大人が中学生に求める事 (3)富士見台の歴史や吉永北、神戸の歴史について (4)中学生が大人に求める事などのテーマについて	【中学生】 ・今の吉原北中と昔の吉原北中の変化を知ってよかった。(昔の駅伝の強さなど) ・地域の人からみた吉原北中学生の姿を知ることができてよかった。 ・学校のアスレチックは父母がみんなで協力して作り上げた。 ・他の小学校区の様子(がんばっている)もよくわかった。	・効果は目に見えていないが、この会に参加したいという希望者が多くなった。(校長先生の話) ・高い効果を求めているのではない。続けていくことで地域の人、中学生の気持ちがわかり、長い時間をかけて効果が出てくるのではないかと役員さんの言葉。
31	花の会(神戸地区)	・第2東名工事に伴い、神戸小北側に大きな花壇ができた。	・近くの花壇をデザインし、種や苗を植えだす。 ・手伝う人が増えた。	・成長してきた草花に名札がつけられ、花壇に足を止める人が増える。 ・大きな人の輪ができ、「花の会」という会ができ、会に誘い合う言葉が聞こえる。 ・有志のアイデアでベンチも置かれ、まわりの小さな空き地にも花が植えられるようになった。	
32	まちづくりセンター講座の企画・立案例 おしゃれ喫茶室	・高齢者学級の企画・立案。1月から2月にかけて6~8回くらいの講座計画。週1回、毎週水曜日、13時30分~15時、1時間30分の講座 ・50~70代の高齢者の講座であるが、生活のリフレッシュ、教養、仲間づくり等、生活に生きがいがある講座の企画	・講座の内容、質を考える (1)文化的—文学 (2)健康面—健康、医学 (3)歴史—歴史研究、人物研究 (4)郷土学習—故郷の歴史、ものがたり (5)芸術、芸能—音楽鑑賞 (6)物づくり、製作的なもの—簡単な物づくり等、質が異なる講座を企画講師の選定を行う。 ・講師との連携で大切な事。主催者側の意図、目標を明確にして、講座計画を作る。	・目標にそっているか、事後の評価、アンケートも活かし、次につなぐ講座にする。 ・この年齢層は教養を深め、何かを身につけるといふ人は少ないと思う。講座を受けて「楽しい」「よかったね」等、その場の雰囲気大切である。 ・講座を通しての「仲間づくり」につながる構想を持ち進めたい ・講座から「答える」もよいが、受講生の期待に応える講座を目指す。	・講師の選定 (1)さまざまな分野の講師を持つ。 (2)会場の選定。まちづくりセンター以外での学習での受講生の送迎等(自動車免許のない人もいる) (3)予算の確保
33	「人づくり」地域懇談会	・地域(PTA・生涯学習)全体で、学校、社会、地域が一体となり、問題及びこれからの地域をどう再生し、また、どうしたらよいかを考える。	・県(大学室が担当)の資料を出席者全員に配布(人づくり・お父さんの子育て手帳他)し、また自分の過去の体験など、特に身近な話して、難しい話しはなるべくしないようにしている。また、社会教育委員会が出た内容を話すときもある。	・話しをしていると、私語もなく聞いてくれているので理解してくれていると思う。効果はすぐ現れるものでもないと思うので、長い目で見る必要がある。	・県の「人づくり」推進員をやっている、懇談会に出席する人は、PTA及び地域の代表者が多く、出席されない人達の「心」がわからない。 ・17名の富士市社会教育委員が全市に出向き、社会教育委員会に取り組んでいることを知らせる必要があると思う。
34	通学合宿	・食事の支度を頼まれて。(民生委員児童委員だったので)	・1泊してから学校へ通学する。 ・地域の人に現状をみてもらう。(ボーイスカウト、PTA、民生委員児童委員、地域の人々) ・お風呂の入り方。 ・感謝して食事を戴く。 ・親からの手紙を読む。	・挨拶がしっかりできるようになった。 ・自分の意見をはっきり表現する。 ・地域の人に現状をみてもらう事で何が問題か把握する。	・預けてしまって親が楽だという考えのところ。 ・同じメンバー。 ・実施場所の確保
35	インリーダー・ジュニアリーダーの養成	・地域の子どものリーダー作り。	・小学生対象のインリーダー養成講習会へ地域より参加させる。 ・中学生、高校生対象のジュニアリーダー養成講習会へ地域より参加させる。	・子ども会行事(町内の夏祭り、クリスマス会、ドッジボール大会など)で、まとめ役やリーダー役となる。	・ジュニアリーダーとして成長しても、部活や受験などを理由として、ジュニアリーダーを抜けていってしまう。 ・いずれ地区のリーダーとなれるようなシステム作りが必要である。
36	町内子ども会の行事	・異年齢の子どもの交流を作りたい。	・町内の公会堂、公民館でのクリスマス会	・クリスマス会の世話人(親)と子ども達共同の準備、本番、片付けを通して、大人と子どもの交流や大人同士、子ども間の交流体験ができる。	・少子化が進んでいることに加え、集団行事に参加したくない家が少しずつ増えている。
37	地区の読み聞かせ	・行政で行うブックスタートの続きを地区ですて欲しい。	・主にまちづくりセンターや図書館などで読み聞かせ、紙芝居、影絵等をしている。	・お話し楽しさを知る。 ・母子のふれあい。 ・読書力がつく。	・お話しボランティアの育成
38	見守り活動	・一人暮らしや昼間一人になってしまう高齢者の方が多いということで、平成18年頃から。(事故、とびだし、誘拐等に会わないように。地域で子ども達の下校時に安全確認)	・健康や体力維持について。 ・どのように孫と接したらよいか。今問題になっている子ども達の現状について話すことも時々している。 ・地域で学校と一緒に催す伝統遊びに参加して、生徒さんと一緒に交流を深める。	・登下校での見守りの際のあいさつや高齢者と子ども達とのふれあいが自然となった。 ・地域で地域の子どもの見守りという意識が少しずつ浸透してきた。	・長続きしない。 ・人数がなかなか増えてこない。

地域教育力の向上につながる取り組み事例

資料2

No	事業名	取り組みのきっかけ	取り組み内容	効果	課題
39	今泉地区 まちづくり講演会	・歴史と自然に恵まれた今泉地区住民の皆さんに郷土の財産を意識してもらい、更には、まちづくり活動の推進につなげる。	・年1回、学識経験者を講師にお招きして、歴史、自然、芸術等の講演を開催する。	・生活に身近な話題、テーマになっているので話もわかりやすく、地域を振り返るきっかけ作りとなる。	・参加者が限られているので多くの人に出席してもらい、地域についてもっと関心をもってもらいたい。
40	少年野球	・息子が野球をやりたいと入団して仲間入り。	・週3回の練習、試合 ・その他、バーベキューや夏合宿、マラソン大会、親睦旅行など。 ・親父の会、母の会。(飲み会も含む)	・野球の楽しさ、規律、礼儀、仲間との協力、異年齢、異学校との関わり。 ・家族で会話が増えた。仲良くなった。 ・親も活動や役員をやることで様々な力がついている。(事務作業、気くばり、炊き出し)	・指導する側との折り合い。 ・役員や当番等の負担が大きい。しかし、それも受けとめた。主体的に楽しんでしまえ、と思えば活動も継続できる。
41	今泉地区 放課後子ども教室「よりみちホッとルーム」	・子どもを狙う犯罪が多発している中、地域が様々な活動を通じて子どもと交流することにより、子どもとの居場所づくりを確保する。	・1ヶ月に1回、第3月曜日を中心に今泉小児童を対象に、地域の皆さんとまちづくりセンターが協働して工作、花植え、軽スポーツ、読み聞かせを行っている。	・地域の皆さんと子どもがふれあう時間が増え、地域で子どもを見守ろうとする意識が向上した。 ・地域であいさつや声かけが積極的にできるようになった。	・協力者が一部の住民にかたよっており、時間の調整による負担をかけてしまう。 ・今後も広報活動を活発化して多くの人に協力をお願いしたい。
42	田宿川清掃活動	・昔はよごれた川になっていた田宿川。大雨のたびに水害が発生してしまうので、沿線の町内が水草の刈り取り掃除を始めた。7月には市民、町内の人々が川を体感し、親んでもらうために、たらい流し川祭りを始めた。6町内、河川委員会を中心に行ってきた。田宿川の清掃に吉原二中の生徒(生徒会)が参加。	・年6回行われている田宿川の清掃作業に(朝6時~9時)吉原二中の生徒が町内会の人達とともに川に入って、草刈、清掃する。7月のたらい流し祭りには補助作業をする。	・大人と一緒に同じ作業をすることで、責任感やコミュニケーション能力が養われる。	・受け入れ側は、参加者が多い時に対応しきれない。 ・町内の参加者の高齢化 ・川の近くと離れている地域との温度差。 ・普段の町内の清掃作業に中学生は参加していない。
43	旧富士川町で実施されている成人式	・市町村合併前から実施している。これまで培われてきた地域のつながりを再確認するために継続している。 ・旧富士川町の新成人が自発的に企画運営している。(富士川地区、松野地区で合同開催)	・成人式の企画運営 ・会場の設営、簡易な式典、交流会(小学校卒業の時に書いた作文の返却、タイムカプセル)	・新成人者の自発的な活動に対して、これに賛同する地域住民が世話人になってできるようになった。又、運営資金を調達するにあたり、地元事業所が協賛するようになった。地域をあげて新成人者を見守り、祝う意識が芽生えつつある。	・新成人者の自発的、非公開の活動であることから、今後、継続して実施されていくかはわからない。(成人の核当が毎年変わる) ・新成人者に限らず、青年が集う場の提供や地域団体を含む周囲からの適切な支援が必要かと思われる。成人式が地域の青年活動まで発展していくことが望まれる。
44	そうだ!沼川プロジェクト	・田宿川の清掃からはじまり、沼川と滝川を含めた地域的活動へと発展した。ウォーキングをして現場の確認	・そうだ!沼川プロジェクト実行委員会を立ち上げ、沼川の有効活用に向けた活動をしている。 ・田宿川から滝川を経て沼川を通るウォーキングコースの整備(草刈り、ごみ拾い) ・ウォーキングの実施。当日は自然観察の会に協力してもらい、観察会、野草のてんぶら(女性の会)等のもてなしをしている。 ・アンケートにより整備作業への参加意志の確認をして、ウォーキング前に整備作業に参加してもらう。	・歩くのが目的(歩く会)等の人達 ・始めて歩く地元の人 ・始めて歩く市外の人 ・自然観察に来る色々な人達	—
45	伝統芸能保存会	・近所のおじさんに誘われた。地域の伝統芸能を保存していくために地域でも支援している。	・週1回の練習 ・年1回のふるさと芸能祭(市内) ・体育祭、文化祭での発表(地区)	・地域のおじさん、おばさんにかわいがってもらい「地域の子」として育ててもらっている。 ・親も地域活動に積極的に関わるようになった。	・後継者不足 ・活動の場が限られている。一方であまり活発にしても負担に思う人もあり、バランスが難しい。
46	吉原祇園祭への参加(伝統行事への参加)	・伝統ある「吉原祇園祭」に地区の老若男女、誰でも参加して、地区の活性化につなげたい。	・永く続いた伝統ある祭りを、1ヶ月以上もお囃子の練習を通して、その技術を伝えるとともに、コミュニケーションを図っていく。	・わずか2日間の祇園祭であるが、他の町内行事へも積極的に参加するようになった。 ・青年団の健全育成にも大変効果がある。	・町内に限定した祭りではなく、吉原から更には富士市を巻き込んで伝統行事にできないか。
47	吉原地区まちづくり推進会議の「子ども見守り隊」	・吉原地区から交通事故や犯罪が起こらなくするために。	・吉原小学校児童の下校時に、地区住民が家から出て、児童の交通安全、防犯活動に協力する。各種団体、町内連合会、生涯学習推進会、安協、警察協力員、女性の会等の協力が必要。腕章、のぼり旗の用意。	・発足2年目の活動であり、周囲の人達への啓蒙と安全のまちづくりの為に必要な活動である。	・学校の終業が曜日、学年によって違っているので、朝の登校時のように一斉に活動できない。 ・町内によっては協力者がいない。

地域教育力の向上につながる取り組み事例

資料2

No	事業名	取り組みのきっかけ	取り組み内容	効果	課題
48	広見文庫	・児童館で子育て支援活動を始めてから。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校での読み聞かせ（小学校、中学校）</li> <li>・児童館やまちづくりセンターでのクリスマス会を通して子育て支援（トーンチャイムの演奏）</li> <li>・地域の福祉フェスティバルの折にストーリーテリング、大型紙芝居、パネルシアター</li> <li>・外部からの講師をお呼びしての本の選び方、読み方、理想とする文庫のあり方等</li> <li>・生き生き子育てサロン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会が終わってもすぐ帰らず、地域の現役のお母さん達が情報交換や子育ての悩み等話す場となっている。</li> <li>・子ども達が落ち着いて人の話をよく聞くことができるようになってきた。（学校や児童館の職員の方からの言葉）</li> <li>・学校での読み聞かせのメンバーがだんだん増えてきた。（開かれた学校という事で学校側の配慮もある）</li> </ul>	・クリスマス会や講演会では費用がかかっている。
49	まちづくりセンターによる家庭教育学級への参加	・核家族化が進み、子育てに不安を持っている若い母親を受け入れてくれる、サポートしてくれている。	・まちづくりセンターで、育児に関することをバラエティー豊かに教えてくれる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育児の不安の解消。</li> <li>・母親同士の情報交換。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政の行う家庭教育学級は、民間のカルチャーセンターにはほとんどないもの。</li> <li>・行政で継続をして地域の母親のサポートをして欲しい。</li> </ul>

## 【議論経過】

- 平成22年 7月 6日 平成22年度第1回社会教育委員会議
- 委嘱状の交付
  - 今期検討課題について意見交換  
家庭の教育力や地域の絆の強化等について意見がだされた。
- 平成22年10月14日 平成22年度第2回社会教育委員会議
- 「家庭や家族の現状と課題」についてグループ討議
  - 今期検討課題決定  
検討課題：「家庭教育を支える地域の教育力を高める方策」
- 平成23年 2月10日 平成22年度第3回社会教育委員会議
- 「地域の教育力向上につながる取り組み事例」の研究  
3班にわかれ、地域の養育力向上につながる事例を列举し、  
取り組み始めたきっかけ、事業内容、効果、実施するうえでの  
課題や問題点等について討議した。
- 平成23年 7月12日 平成23年度第1回社会教育委員会議
- 家庭の抱える問題の類型化
  - 地域教育力向上につながる取り組み事例の整理  
3班にわかれ、各班ごと「理想的な取り組み事例」の作成
- 平成23年10月31日 平成23年度第2回社会教育委員会議
- 理想的な取り組みを阻害する要因と解決策について  
・人材発掘、情報発信、活動団体の連携
- 平成24年 2月22日 平成23年度第1回社会教育委員会議臨時会
- 意見書素案の作成  
・全体構成について  
・地域の教育力を高めるための方策の視点について

平成24年 3月12日 平成23年度第2回社会教育委員会議臨時会  
■意見書案の作成  
・地域の教育力を高めるための方策の視点について  
・家庭の教育力向上のための「理想的な地域の取り組み」

平成24年 3月28日 平成23年度第3回社会教育委員会議  
■社会教育委員会議意見書  
「家庭を支える地域の教育力を高める方策（案）について」  
■その他（地区まちづくりセンター懇話会との連携）

平成24年 4月 3日 社会教育委員会議 正・副委員長会議  
■意見書の最終取りまとめ

## 富士市社会教育委員名簿

任期 自平成22年6月1日

至平成24年5月31日

No	氏名	所属
1	久保田 文章	富士市立神戸小学校校長
2	森田 嘉幸	富士市立吉原第三中学校校長
3	杉山 由隆	富士市町内会連合会会長
4	中村 たかね	女性ネットワーク・富士理事
5	山田 榮一	富士市生涯学習推進会連合会会長
6	辻村 典枝	富士市文化連盟副会長
7	金刺 靖雄	富士市体育協会会長
8	荻野 克雄	富士市子ども会世話人連絡協議会会長
9	井出 裕介	富士青年会議所青少年開発委員会委員長
10	涌田 恵美子	富士常葉大学保育学部講師
11	牧野 保	ボーイスカウト富士地区委員長
12	渡井 清視	ふじ環境倶楽部代表
13	柚木 恵美子	学識経験者
14	松本 玲子	学識経験者
15	石岡 かつ子	学識経験者
16	下川 幸子	学識経験者
17	川口 利浩	富士市立高校教頭

※No4中村たかね委員、No9井出裕介委員の任期は平成23年6月20日～平成24年5月31日